

ここに遠くない場所の、庭にウルトラマンを建てていた家があったことは知っているが。じつはこのあとで、夕刻、ここに近い町内を歩いていて、綿の実が白く下がっているのをみたことがあって、これは一株だったが、夕闇にふあーとたしかに花が浮き出ているようだった。すぐに綿かなと思ったので、近い道沿いにいた女性に確認してもらっている。

綿花、はテレビでみたことがあるかぎり、綿は、学生の頃、港のバイトではしけ岸の倉庫に運びこむ作業をしたことはあった。畑でこんな風に綿の実をみるのは初めてのようだった。そこで、書いてみた歌、

畑すみの枯れ枯れとする枝先に下って塊は綿かな白し

明治中頃のこのあたり一面の綿畠を思い描いてみる。

「清紫会」だより

- ◆第149回 平成二十八年十一月十七日(木)、会場・文京シビックセンター三階A会議室
〈提出作品〉林博子・背広の丈
- ◆第150回 十二月十五日(木)、会場・文京シビックセンター三階A会議室
〈提出作品〉市川茂子・料理の本を見て／林博子・のすたるじあ／松井淑子・買い物帰りに
- ◆第151回 平成二十九年一月十九日(木)、会場・文京シビックセンター三階A会議室
〈提出作品〉市川茂子・目の前が変わる／小野澤繁雄・年始がすぎて

(松井)